

# 児童養護施設における性的マイノリティの子どもの存在とその環境

——児童養護施設 LGBT 児童対応調査の結果から (1) ——

○金沢大学 岩本健良

静岡大学 白井千晶

埼玉大学 渡辺大輔

レインボーフォスターケア 藤めぐみ

## 1 目的

E.ゴッフマンは「全制的施設」(total institution)という概念を提起し、施設に収容された人を隔離して生活を統制する種々の施設について考察した。性的マイノリティ児童は、学校とりわけ修学旅行などの集団行動の際に大きな困難を抱えている。加えて児童養護施設では、下校から登校までの間も、入浴や就寝なども集団生活を送るため、その中で過ごす性的マイノリティ児童はより大きな、「毎日が修学旅行のような困難」を抱えていると推察される。日本では性的マイノリティ児童に関して、児童養護施設での状況はいまだ調査されていない。本研究では、性的マイノリティ児童の在籍状況や居住環境、職員研修、施設での配慮などの実態を明らかにし、支援や改善に役立てることを目的とする。

## 2 調査方法

2016年11月、社会福祉法人全国児童養護施設協議会 HP 掲載の「全国児童養護施設一覧」に掲載の全601施設に調査票を郵送(可能な場合はメール送信も併用)し、220施設より回答を得た(有効回収率36.6%)。

## 3 主な結果

性的マイノリティの児童が「現在いる」と回答した施設は16.4%あり、過去と現在を合わせると45.0%に上った。しかしLGBT児童の割合から見ると職員からそうと認識されない児童も多い。こうした児童は、回答でのべ133名あり、内訳は女兒的言動の男児43名、男児的言動の女兒44名、同性愛(両性愛)的傾向の男児28名、同女兒26名、性分化疾患らしい児童2名、等であった(一部重複)。

施設環境のうち、寝室のタイプについて低年齢では「相部屋のみ」が多く、年長になるほど、「個室のみ」・「個室と相部屋」(両方)、という施設が増える。相部屋の場合の最大人数は、2人から8人まで幅がある。大人数の相部屋や集団入浴などにより、他の人に邪魔されない時間・空間やプライバシーの確保が困難な児童も少なくない。

子どもへの性教育の内容として、プライベートゾーン、他者の気持ちの尊重、二次性徴については2/3以上の施設が実施しているが、性の多様性については23.6%と低い。約半数の施設では性的マイノリティや性の多様性についての職員研修が行われておらず、施設(職場)内で職員の学習機会を設けているのは20.5%しかない。

## 4 結論

性的マイノリティ児童の存在は約半数の施設で職員が認識しているものの、職員への研修や環境は施設により差が大きい。全職員への研修やプライベート空間の確保など、改善を進める必要がある。

### 文献

一般社団法人レインボーフォスターケア・岩本健良・白井千晶・渡辺大輔 2017. 『「児童養護施設における性的マイノリティ(LGBT)児童の対応に関する調査」報告書』一般社団法人レインボーフォスターケア. (<https://rainbowfostercare.jimdo.com/> に詳細版とダイジェスト版を掲載)